

ネコと一人の男と多摩川

川岸生男

「缶ちゃんいるか、今日は出かけないのか」

「ん、パンク直してから出かけるよ」となりの小屋の缶太郎が缶助に声をかけたら返って来た言葉である。この缶助が缶太郎のとなりに来て、小屋を作ってから今年の冬で、三年目である。ここは東京神奈川の間を流れる、多摩川の、かせんじきだ。別名多摩川村とも言う。この村の人々は特産物のアルミ缶を売って、生活している。なにせこの村には電気ガス水道、一般の人々のくらしに必要なライフラインがせいびされていないので村でくらす人々は夜暗くなると、ねて、夜明けとともに起きて缶集めするという、いたってけんこうなくらしである。朝おきて川風をあびて、しんこきゆうをして、「さあ今日はどこを回って来るか」と一考してタバコに火をつけて考えるのだ。缶太郎も小屋の前で今日は天気がいいからちよつと遠出して来るかと考えながら川を見つめてワカバ（タバコ）に火をつけた。そのときである、ニヤーと小屋の裏手から缶太郎のかつているネコが今帰ったとでも言うように缶太郎にあいさつした。このネコの名前は花子だ。缶太郎がここに来て小屋を作ってから、いついたネコだ。いわゆるすてネコであった。川原の石の上にダンボール箱に入れられて無造作に置かれていた。わきにはネコ缶一個置かれていた。まだ生れて、一三ヶ月の小ネコだった。あれから今年の春が来れば8才になる。「よしよし今こはんをあげるからまつている」缶太郎が小屋に入って花子にえさをやっている。「やあ、やつと直したよ。後（うしろ）だから手間がかかるんだよ」と言って缶助が小屋の前で石にこしかけて、エコーに火をつけて何かぶつぶつ言っている。今日は天気がいいからといってまだまだ年が明けて一月の半ばだ。かせんじきは冬は風のとめたさと、なつは、てりつける日ざしで、さえぎる物がなにもないから一年を通して、今日はすこしやすうと思える日は、数えるほどだ。それに、この村には毎年たのみもしないのに台風が来てみごとにきれいに村のテント小屋を片付けるのである。この村の人口はざつと数えて400人余りである。住人の名前はと言うと生れたときに付けてもらった名前とみんなちがうのだ。自分で付けた名前である。かんたんに言う「ぎめい」である。この名前で缶太郎のも一回こまつた事があった。それは今から三年ぐらい前だったと思うが五月の世間では、連休と言っている、ある日のことだった。缶太郎の小屋をたずねてある一組のごふうぶが「こんにちはだれかいますか」と言って缶太郎の小屋の前に立っていた。「はいどちら様ですか」缶太郎が小屋から出てあいさつした。「あのどんなことでもいいですから見おほえがありましたらお話しえ下さい」と言って、二人そろって、ていねいにおじぎした。そして、おくさんの方が「この人は私のおとうとで、19年前、とつとり県から家出した」と言う。かていのささいな事からであったと言った。そして今日の今日まで何のたよりもないと言った。缶太郎も一

日置きにここから15k余り下った町に缶を売りに行っているが、何せ毎日350人からの人々が缶を売りに来ていて、いちいちその人たちのおおをおほえていないのである。知っていても、10人足らずで缶売り場で会えば、あいさつするていどである。このごふうふによれば缶売り場に毎日した人（弟）がくるらしいと言う事をだれかに聞いたらしい。何せこの村は東西にそって流れるやく50kにも及ぶ川ぞいに何百けん小屋があるので、まして19年も前の写真を見せられても、今では多少かお、体つきもかわっているだろう。そのごふうふは、きのう上京して昨夜はホテルにとまって朝早くこのテント村を川下から川上まで一つ、一つ、たずねて来たと言う。あせをふきふき缶太郎の小屋まで来たのである。缶太郎の小屋は、多摩川村の中ほどである。「はいよく分かりました。よろしければその写真を一枚置いていってくれませんか」と言って缶太郎が「もしもこの写真にした人がいたら声をかけてみます。当人であれば必ずこの住所にこれんらくします」と言って缶太郎が写真をうけとった。そして「このあつい中ごころうさんでした」と言って缶太郎もあたまをさげた。ごふうふが立ちさったあと川上に二人がさって行くのを、缶太郎がふくざつな思いで見っていた。あのごふうふはいったいどこで、この広いかせんじきにいると知ったんだらう。いやもしかして毎年このじきにこのような人たちのいる所をたずね歩いてくるのだらうか。それにしてもこの村はそういう人々のあつまってくらしているところである。もし毎日ではないけど缶売り場に、にたような人がいたらそつと声をかけてみよう」と写真に書かれた名前と住所が消えないように缶太郎がビニールふくろにていねいにしまった。缶売り場では缶を売るとき名前を書かなくてはいけないから缶買い取りの人にきけばわかるのだが何せみんな名前は芸名で書いてもむりというものだ。缶太郎は今までの人生をふりかえりほんやりとあのごふうふが立ちさった川上のほうをいつまでもいつまでも見ていた。そして缶太郎はむねポケットから、タバコを出して、一口すつてから「ああそらだ今日は何町を回るよ이었다なあ」時計を見たら午後2時を回っていた。小屋の上を見たらネコの花子がきもちよさそうに目をとじている。缶太郎が花子にこえをかけたらおおあくびしてまた目をとじた。缶太郎の今いる場所はちょうど川岸から4mぐらいの高さのちよつと川中にせり出した所である。ここに来てからも8年になるがこの川ぞい一帯では一年を通していろいろな出来事が流れて行く。まずおどろいたことには自さつ者の多い事である。ある人はヤナギの木で首をつる人。またある人は橋から身を投げる人。また入水自さつする人。死に方もいろいろである。缶太郎の小屋の前はチョットしたグラウンドになっていて休みの日は一般の人々のいこいの場である。このグラウンドの向うはちよつとしたゆう歩道になっていて、そのわきに、大きなやなぎの木があるがこのやなぎの木はじゅれい50年ぐらいで、なつはここをとる人々のかっこうのすずみ場所である。何せ枝がゆうほどうに大きくせり出しているのだ。このヤナギの木で缶太郎がここに来てから首をつつて自さつ人が4人であった。その中の一人が缶太郎の友人である。その友人は横浜で日やとい仕事をしていて、月二、三回缶太郎の小屋にあそびにきていた。その年は

8月のあるあつい日であった。「おい缶ちゃんいるか」と言っておおを出した。何かその日はサイフでも落としたようなさえないかおつきで手には酒をぶらさげていた。

「おおよく来た。体はだいじよぶか」と言っておおと小屋の前の川流れて作ったイスに二人ならんでこしをかけて、その日は色々と話をして楽しくのんで午後11時を回ったころ缶太郎が「そろそろランプの石油が切れたから休むか」と言ったら友人は、「おれはあついから外でこのイスでねるよ」と言っただけで横になった。「いくらなつでも朝方はよつゆがおきるから体によくないよ」缶太郎が中でねるように言ったが友人が「何なんともないよ。いつも仕事がないと外でねているから」と言っただけで横になった。

缶太郎の小屋の前から80mぐらい行くと土手になっていて土手の上はサイクリングコースだ。この道を缶太郎たちはアルミかい道と言っている。土手は二重になっていて、台風が来たときはみんなこの二重になっている下の所にひなんするのだ。その土手の下の大きな木が友人が首をつったヤナギの木だ。缶太郎がネコの花子におこされてえさをやるろうと外に出たら友人がいない。「あれどこにいったんだ。また酒でもかいに行つたのか」缶太郎がそれにしてもまだ朝の夜明け前、まだ3時すぎたばかりだ。

ま、ちよつと外でまってるか。缶太郎がタバコにマッチで火を付けてタバコをすつていたら何か向うのやなぎの木の下の方から人の話し声がする。まだ夜明けまえでうすぐらい。遠くからパトカーのサイレンの音が近づいて来て土手の向こう下で音が消えた。また何かの車が事故でもおこしたんだろう。缶太郎はそう思いまた小屋の中に入って横になった。そしてとうとうとして10分もたっただろうか。「こんばんはこんばんは」いやに大きな声で、小屋をたたく音がした。ネコの花子がびっくりして外へとびだして行く。「すみません朝早くからおこしてすみません、ちよつと来て見ていただきたい人がいるんで見てもらえます」小屋の前に立っていた人はけいさつかん二人である。缶太郎は何ごとだろうと思ひ「はいいいですよ」と言っただけで外へ出て、二人の後から歩き始めた。20mも歩いただろうか。缶太郎の足が止まって前にでない。どうしたんですか。缶太郎の前を歩いて一人のけいさつかんが声をかけた。「ああそうだったのか。ゆうべは人がかわつたように楽しく酒をのんで、いつもなら自分の事はけいさつかん二人である。ゆうべにかぎつてふるさとの妹や姉さんのことなどよく話したなああれがこの世の話し終りだったのか」今はけいさつかんのだ。けいさつかんのこえに缶太郎は、はつと気づき前に歩き始めた。まぎれもなくその木にぶらさがっていた体は友人であった。友人はある県のある市生れであった。(きょう年45才)

今日もその木の下ではさんぼ中一休みする人、夕すずみする人、いろいろとこの木は見えて来たのだろう。一夜明けて全部調べが終つて、また何もなかったかのよう今日も人々はここで一休みしてとおるだろう。もうゆうべここで起きた事などだれも知らない。知っているのは缶太郎とこの木と、そばについて来たネコの花子である。そうこうして多摩川の仲間たちの時間が流れているのだ。このかせんじきでくらす人々は今日を生きているがせいっぱいである。明日事など考えられないのだ。缶太郎もいっしょにくらしている

ネコより早く死ねないのだと知っている。今日の食材を買うにもまずネコの食事をかって残った金で自分の食材を買うのだ。夕方になったので缶太郎は外でサンマを一ぴきやきはじめた。ネコと半分っこだ。さっきから花子をはなをひくつかせている。缶太郎が横のふくろのおにぎりを出そうと横をむいてまた前を見たらネコの花子とサンマが消えていた。缶太郎が一言今日は、おにぎり一つかとおぶやいた。

〈選評〉 初めてこのような文章を書いたとのこと、とても生き生きとした文章に魅了されました。臨場感のある細かな描写が、「多摩川村」での生活を読ませます。多くの人がそのそばを通ったことのあるだろう河川敷のテントや小屋では、このような生活が繰り広げられているのですね。後半の出来事はとても重くて読んでいても胸が苦しくなりますが、いたずらに感情的にならない描き方が、かえって読む人にその気持ちを想像させて、迫ってきます。多くの人に見えているのに意識されない生と死が、こんなにも大きな存在感を持つて描かれたことに感銘を受けました。(星野)